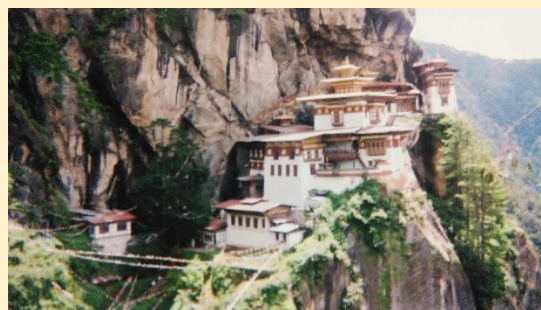


第一回 ブータン旅行

(2012年8月10日～8月18日)



ブータン国王ご夫妻



名刹タクツァン僧院

私がブータンに行きたいと思ったのは昨年秋、新婚のブータン国王ご夫妻が来日され連日テレビで様々な報道がなされた時であった。私は思った。ブータンに行きたい！絶対に行く！今年は無理だが来年中に。誰が何と言おうと行く！もし私がいなくて家で困るというなら家政婦さんを頼んででも行くんだ！と決心したのであった。そしてガイドブックを買い、旅行会社を選定して相談を開始。言葉は英語でOKとわかったがブータンの国語であるゾンカ語についても知りたくて、しかし書店ではそこまでは手に入らず（後日注文して入手した。）類似しているというチベット語の学習書も購入したりした。ただしそれが実際に役立つほど身に着けるには至らなかった。

夫にそのことを打ち明けたのは一月末である。時期はいつならいいかと尋ねると八月のお盆の時期にしてくれとのこと。そこでその時期に、ということで旅行会社に予定をたててもらった。ちなみにツアーというのもないことはないが、大変少なく選ぶほどの数はないので、たとえ一人でも二、三人でも二十人でも同じ、自分の都合に合わせてアレンジしてもらうのが現実的だということであった。そしてブータンを旅行する場合は一人だろうと二十人だろうと必ず日本の旅行会社とタイアップしている現地の旅行会社が世話をしてくれる専用車と運転手とガイドが付くことになっていて、それからホテルも食事の場所も決めてもらって、見学や観光をしたい場所もあらかじめ希望を出してそれに合わせてアレンジしてもらってそれらをブータンの当局に提出してOKを出してもらった上でなければ入国も旅行も許可されないということであるので、それは不自由だと考える人もいるかもしれないが私はむしろとても安心して安全な旅ができると思った。

こちらの予定はあらかじめ希望を出せば最大限受け入れてもらえるし面倒な手続きは殆ど旅行会社がやってくれるし。そしてどこに移動するのに車、運転手、ボディガード付

きなのであるからまるでセレブになったような気分である。夫はずいぶんいろいろと心配していたようだが私はワクワクしていた。

それからなぜ私が誰かと一緒に行こうと考えずためらいもなく一人で行こうと思ったのかというと、自分一人が家から出るのさえ大ごとなのに、人を誘ったり予定を合わせたりする余裕なんてあるわけがないからである。同じ市内に住んでいる友人三、四人で集まってそこから辺のファミレスでランチをしようかという話でさえ一年に一度実現すれば上等というのが実情なのである。友人についてだけではなく家族だって同行するというのはもっとありえない。もともと私はひとりであるのが好きで、旅行とは非日常を楽しむためのものなのに、家族の誰かと一緒では日常を大荷物にして背負って歩くようなものでバカンスの意味をなさない。夫と二人だけの旅行だったら旧婚旅行として悪くないかもしれないが、詳しくは後述するがそれでは留守中にほかの家族の生活ができなくなってしまうのである。

あらかじめ計画書を提出し、車もガイドも決めておかないと外国人は旅行ができないというシステムは他の国では無理だろうが、ブータンのように人口も少なく（九州くらいの広さの国土に六十九万人だとか・・・）交通の便が悪く、独特の生活習慣を持ち、貴重な文化財に満ち、政治的には安定していて国民の生活もよい状態に保たれている国にとってはとても良いシステムだと思う。実際外国人の中には何をするかわからない人たちもいることであろう。悪気がなくたって知らなければ日本の豊の上に土足で上がったり浴槽に石鹸をいれてしまったりするのではないか。規制が緩いと犯罪も増えるだろうと思う。

さて私が海外旅行で家を空けるための条件がなんとかなりそうだった途端、すなわち2012年の2月以降、我が家では波乱万丈の日々が始まった。まず二月半ばに当時八十七歳だった義母が骨折して入院、手術をして回復を待った後4月30日に退院したのだが、病院でもう退院しても大丈夫と言われたから退院させたのに、タクシーで家に着いてみたら何と義母は殆ど足が立たない状態で、義父母の住居である二階まで力持ちの義姉がおんぶをしてやっとのことで上げるはめになった。いやもう大変なことであった。私は非力なので30kg以上の人間はおんぶできないし、夫は腰痛持ちだし息子はその時不在であった。

要介護4ということになった義母はその後いろいろな介護サービスを利用することになった。訪問看護が週一回、訪問入浴が週一回、訪問診療でお医者さんが家に来て下さるのが月一回、それから月に六千円分のおむつの支給があり、訪問美容師さんが年四回無料でヘアカットにきてくれることになった。そんな状態でヨメが呑気に八日間も海外旅行か？と言われるかなとも思ったが、それでも今行かなかつたら一生行けないではないか？！

私が自分より年上の人たちを皆見送って誰の世話もしなくてよくなる頃には多分私は七十五歳を過ぎているであろう。そんな年齢になってからいったいどんな楽しい旅ができるというのか。気力だけではダメである。体力だって大事だろう。まだ辛うじて五十代のうちにひょっとしたら四十代か三十代にも見えるかもしれないぞ❖ という気分で行く方がよほど楽しいはずだ。七十代、八十代のセレブなマダムとして旅行するのもいいけれどそ

れだけでは嫌だ。

力強い協力者として期待していた義姉には四月ごろに相談した。義姉は夫が仕事に行かなければならない日には来てくれることになった。息子にもそのころに伝えた。息子は日ごろ「お母さん、好きなように生きればいい」などと言ってくれてはいるが、実際のところは自分のことだけで精いっぱい、殆ど役には立たない。お盆のころもずっと出勤していたので夫が息子の朝食と弁当と夕食の用意に四苦八苦することになった。



夫の奮闘

甘ったれでやっかいな娘には専門学校が夏休みになったころに伝え、義父母には出発の十日前、義姉がいた時に発表した。幸いそのころには義母はかなり回復し、室内用の歩行器を使って歩いてテーブルまで行ったり自力でトイレに行ったりできるようになっていたので私としてもかなり気が楽になっていた。それと、実は五月下旬に息子が気胸という肺の病気になる十日間入院したのだがその後は仕事に復帰していた。

息子は子供のころは偏食のひどい子で大変だったがもうこのころには昔ほど食べ物の好き嫌いを言うことはなくなっていた。しかし忙しいと面倒で食べないとか疲れていると食べられないとか好きな物しか食べないとかいうことがあるので、私が食事を作れない時に、お昼は何か買って食べて、とか外で食べてきて、とか言ってもOKはしてくれるとしても実際には殆ど食べていないということになりがちなので、そんなことが重なって痩せこけてまた気胸などになられても困るのでやはり食事は用意してやらなくてはならない。それでそのころは夫とよく相談して便利な食品などもいろいろ買い込んだりした。

息子はそのころ赤十字の血液センターに勤務していた。献血バスに乗ってあちこち走り回っていたのだが朝四時半起きで五時半に家を出るなどという日があるので弁当と朝食を用意する人間はその日は三時半起きをしなくてはならない。夜も帰宅が十時過ぎだったりするのでそうするとおさんども更に大変になる。だから私が留守の間は夫は大変だったわけだが、私も出発直前まで「早く日本を脱出したいよ～！」という感じだった。

そしてとうとう日本脱出の日が来た。2012年8月11日、午前0時20分、羽田発バンコク行きに搭乗である！



ブータンに行くにはタイで乗り換えをしなければならぬ。バンコクまではタイ航空機で六時間、エコノミークラスだったのでかなり窮屈な感じであった。大型機に何百人も詰め込まれているので余計に圧迫感がある。それに比べるとブータン航空の機体は新幹線の一車両ほどの大きさだったので同じエコノミーでもあまり窮屈な感じはしなくて、それも昼間で四時間弱のフライトだったのでまるで新幹線に乗っているような快適さであった。揺れも少ない気がした。

早朝バンコクに着いた時にはとても涼しかったので「東南アジアだけ日本ほど暑くはないのねー」と思っていたら、午前十時ごろブータンのパロ空港に着いたら日本のように暑くてびっくりした。



パロからティンプーへの道



首都ティンプーに到着

パロから車で首都ティンプーに向かったが曲がりくねった山腹の道を二時間、高度が上がっていくせいもあってか気分が悪くなり、途中で休憩したりした。山の中なのに道端で野菜を売っていたりした。その中にリンゴがあって、小ぶりで赤と緑がいい具合に混じった色でとても可愛らしいので買って帰りたいくらいだったのだが荷物になるので買いはしなかった。でも後から考えると買わなくてよかったのである。このリンゴのせいであとでひどい

目にあった。



道端のお店屋さん



とても可愛いリンゴたち・・・だが

標高は首都ティンプーで3000mくらいだという。空港のあるパロが2400mくらい。ティンプーではホテルの階段を昇ると呼吸が苦しくなった。三階の部屋だったがエレベーターはなかった。ちなみに私はブータンでは未だかつてエレベーターというものにお目にかかったことはない。(2019年現在)尤も建物の高さは四階が最高のように、それ以上高い建物もまだ見たことはないが。部屋での荷物の片づけなどの動作もゆっくりやらないと疲れる感じであった。

ティンプーのホテルには二泊した。トイレの水は何度でも流れるのだが紙がなかなか流れなくて困った。ホテルはメインストリートの傍にあり、部屋の窓からいろいろなものが眺められた。朝はホテルの前の道を高校生たちが登校していくのが見え、夜が更けると犬たちが喧しく吠え合っていた。



ティンプーでのホテルの部屋



窓の外の犬たち

朝、通学していく高校生たち

ブータンの犬は人間に飼われてはいなくて自由に生活している。しかしよく見るとグループがあるらしく、ある時間になると集合して対立するグループと張り合ったり列を作ってどこかに出かけて行ったりする。犬種は何というのか、日本にも昔いたんじゃないかという雰囲気、ちょっとオオカミっぽい形をした黒や茶色の犬ばかりで、もしブータン国内で白い犬を見たことがあるとしたらそれは外国人がペットとして連れてきた犬だと決めつけていいのではないと思うくらいに私は黒と茶色の犬しか見なかった。

ブータンの犬は殆ど野良犬、といえはその通りだが私には人間族と犬族がそれぞれの生活をしているというように見えた。といっても犬たちはどこかで人間からエサをもらっているわけだが。野良犬には違いないが彼らは別に人間に危害を加えたりすることはないようだ。名前がついている犬もいるようで、私がお世話になったガイドさんは町で出会った犬に何か名前呼びかけていた。

ブータンの人々が普段普通に着ている民族衣装、男性の物は「ゴ」、女性の物は「キラ」という。私がどうしてもブータンに行きたいと思った理由の第一が、人々が全く自然に普段から民族衣装を着ている国だからということであった。しかも他のアジアやアフリカの民族衣装と違って「いかにも」という感じがなくてとても自然に見えるのである。例えば昭和前半までの日本で普通の人々が普通に着物を着ていた、洋服を着ている人もいたが洋服とごく和服が無理なく調和していた、それと似たような感じがした。それで今回の旅の目的の第一が「ブータンで着物を着ること」だった。私は義母から譲られてとても気に入っている秩父銘仙を二枚と下着、帯、小物一式をスーツケースに詰め込んだ。



ホテルのロビーで



奥のはパロのホテルで着た着物

私はブータン二日目の、ティンブー地内観光の日にはまずそれを着た。もちろん超！目立った、でも皆とても嬉しそうな顔をしてくれた。特にいつもホテルの玄関前でウロウロしているおばあさんがいて、(外国人を見るのがすきなのかも・・・) その人がワア～！！という感じのものすごく輝いた笑顔を見せてくれた。私と一緒に歩くガイドさんは(オジさんみたいに見えたがまだ二十八歳だそうである。) ガイド仲間なのか顔見知りの人に出会うと何やら冷やかされている様子であった。それから最後に泊ったパロのホテルで夕食のときに着

て、これまた大変な注目を浴びてしまったのだが、この時は残念ながら写真を撮ってもらうのを忘れてしまった。あまりに目立ちすぎてしまって、実のところ私はとても緊張していたのだった。



カジュアルでは洋服とのコラボが可能

ブータンにおけるゴとキラは日本におけるスーツのようなものであり、外出着であり仕事着であり、子供たちの通学服である。家にいる時は子供や中年以下の人々はTシャツに短パンのような服装だったり下校する中高生が三分の一くらいジャージの上下だったりしていたが、基本的に人前に出る時にはゴとキラを着るべきということになっているようである。そういう国にどうしてジーンズやTシャツなどで行く気になれるであろうか？尤も殆どの外国人はそういうラフなスタイルなのだが、でも私はそういうのは嫌だった。それから洋服といってもスカートをはいている女性はいないのである。だから私がおとなしいデザインスカートをはいていても目立つのである。(後になってからわかった。目立つのはスカートだからではなくて短いからである。ブータンでは女性は半袖Tシャツやジーンズを着用することはあっても脚は出さない。キラの丈は必ずくるぶしまである。) インドから来た女性が華やかなサリーで歩いていてもインドの女の子がパーティー用か？と思うほどのキラキラ、ヒラヒラの派手なワンピースを着ていても誰も振り返らないのだが。多分ブータンの人々はゴとキラとインド人の衣装とジーンズやTシャツのようなラフな洋服以外を目にする機会は殆どないのだなと思った。

ちなみに私が「どうしても着物を」と思ったのはブータンだからである。インドや中国だったら絶対に持っていかない。韓国や、他のアジア諸国に行くとしても多分持って行かない。ヨーロッパだったら？・・・それは時と場合による。

先ほどちょっと出てきたリンゴの話である。露店や市場のリンゴを見て「かわいい🍏」と思ったその日の夕食のデザートにスライスしたリンゴと桃が出てきた。日本とは違ってど

ちらも皮付きのままである。でもそれは構わない。日本でも私は皮のままリンゴも桃も食べることがある。しかし・・・桃が固くて昔の桃みたい・・・なのはまだいいとして、リンゴの方が全く甘くなく、酸味も殆どなくただ固いだけ！一切れ、二切れやっとなら食べたがそれ以上はギブアップであった。収穫が一か月早かったんじゃないか？と思ったくらいであった。でもその恐怖のリンゴはその後一日おきくらいに食卓に現れた。

ひどい目に遭ったのは四日目、前日にティンパーを発って車で八時間かけてトンサという中部地方の町に行き、そこからの帰路上のことであった。前日にも入った旅行者用のレストランで昼食をいただいた後の午後二時ごろのことであった。



ここを通れば必ず寄るケンペンレストラン

ところでブータンの食べ物は大変辛いと言われているが外国人に対してはとても配慮してくれているようで、実際には辛い食べ物は一度に一、二品くらいしか供されず、苦手なら食べなくてもいいようになっている。だから私にとって辛さは問題ではなかった。しかし全体的に何でも皆固いのである。人参、いんげん、カリフラワーなどはちょっと湯がいただけのような感じだし、じゃがいもやナスは普通の味でまあ美味しかったが、トーストが出てくればいかにも素朴な手作り風のパンですぐ固くなり、また固くない料理であつてもろくに味がついていないので何かかけたくなるが調味料は塩、コショウくらいしか置いていない。シリアルやパンケーキなどもよく出てきたがそれにはジャム、バターがついていた。でもオムレツの調味料が塩、コショウだけではとても寂しい。だからあまり食欲をそそられないことが多かった。

それでも私は、海外旅行に醤油を持参するなんてことはしたくない、というような変なプライドがあつてどこの国に行ってもその土地のものをちゃんと食べるという方針であつた。そしていつも食事を楽しみにテーブルについて「さあ食べるぞ！」と思うのだがそれなのにそこで胃がフリーズするのを感じてしまうのだ。胃の奴がこのようなにのたまう。「わ、マズそう！オレ、嫌だ。そんなもの口に入れるな。オレ動かねえぞ！」しかし私はまあまあ、とそいつを宥め、一生懸命出来るだけ食べた。尤も大概量が多すぎるのでそんなには食べられ

なかった。そして思えばいつも食後一時間くらいはベッドに横になって休んでいた。胃腸の諸君もブーブー言いながらもそうやって宥められては嫌々ながらも一生懸命働いてくれていた。

しかし旅の四日目の昼のことである。その時の食事がわりと食べやすい味のものであった。「美味しかったじゃん。」と置いていたらレストランのお姉さんが「デザートです。」と言って例のリンゴのスライスしたものを皿にのせて運んできた。量的には一個の半分くらいの感じであった。私は「ゲッ！」と思ったが、私一人のために（ガイドさんや運転手さんは食事に同席することもありしないこともある）切っているところを見ていたのでとても「ノーサンキュー」とは言えず、頑張って全部食べてしまった。そしてそのエエカッコシイが、直後に大変な結果を招くこととなった。



道中の風景はこんな感じです

食事を終えて車が出発して間もなくのことである。私はお腹にガスが発生したのを感じた。それで「ちょっと横になってガス抜きをしよう。」と考えた。ところが五分くらいして「これはガスじゃない！」と気づいた。そして「すみません。トイレ！」と言って車を止めてもらい、「トイレ」を探して歩いた。そこは山道であったが一応幹線道路なので道幅は普通の小型車がすれ違えるくらいはありその両側には木も藪もあるのだが山側には隠れられる場所というほどのものはなく、谷川は木は生えていても斜面が急すぎて足を踏み入れたら転落しそうである。それで私はしゃがめる場所を探して数百メートル今来た道に戻り、やっと用を足して車まで戻ってくる、ということを三回も繰り返すはめになった。

あれはもう間違いなく胃腸クンたちのストライキであった。「ふざけんなよ、こんなものを送り込みやがって！もう、キレた！やっつけられるか！」というわけで仕事を放棄し、まだ消化作業の途中だったものをそっくり流して捨ててしまったのであろうと思われる。それで以後私は大いに反省し、イイカッコをするのはやめて胃腸の負担になりそうなものはもう食べないことにした。そして大丈夫そうなものを一口につき五十回も百回も噛み、量を食べていないのが目立たないようにした（ビュッフエ式が多かった）。食欲が全くない時には食べないようにして、そうしてようやく帰国する前日の夕食時にはお腹の調子はほぼ正常に戻っていた。

それでもブータンではあの固いリンゴがとても愛されているようで、五日目の夜に宿泊したパロの民家でもリンゴを勧められるので困った。「リンゴを食べすぎてお腹を壊した。」とまで言ってお断りした。そうしたらご主人が「お腹の調子が良くなるから」と言ってお意気込んで下さったのは、多分緑茶の一種だった。ブータンではお客さんには普通バター茶を出すようである。これはお茶と言うよりスープのような雰囲気のもので、私もいただいたが、飲めないことはないが正直言っておいしいものではなかった。そういえばホテルでも食事の初めにスープが出るのがよくあったが美味しい味ではなかった

どうやらブータンの人たちが外国人客一般のために作って下さる西洋風の食事は調味法がよく確立していないように見える。あるいは塩、コショウ、砂糖、バター、ジャム以外の調味料が手に入りにくいのかもかもしれない。ブータン料理の味付け用にはいろいろあるのだろうが辛くなりがちなので洋風料理には使わないのかもかもしれない。

尤もティンプーなどの街中を探せばイタリアンの店とかおいしいパン屋とかいろいろあるようなのだが、特にリクエストを出していなかったので行かなかった。最後の日に車の中でふと、アイスクリームというものが世の中にはあったということ思い出して、食べたいなあと思った。「ブータンにもアイスクリームはありますか？」とガイドさんに尋ねてみると笑いながら「ありますよ」とのこと。もしまたブータンに来ることがあったらその時はいろいろ考えよう、ケチャップもマヨネーズも持ってこようと考えた。食べ物の味ってこんなに重要だったんだ。気分だけの問題ではなく健康に大きくかわることだったんだとよくわかった。

牛についての話である。インドでは牛がとても大切にされていると聞くが、ブータンでもそうだった。ブータンでは犬も大切にされていて、大概野良犬の身分であるとはいえないじめられたりはしていないようだし適当に人間からエサを貰いながら気ままに犬同士の社会生活を送っているようである。が犬とは違って牛はれっきとした家畜でちゃんと飼い主がいる。しかし国の中央を東西に走る、日本ならば国道一号線にあたる幹線道路上を実にのんびりと牛たちが歩いている。車が来ても気にしない。車側は轆き殺すわけにはいかないのでクラクションを鳴らし続けるのであるが全く動じない。あいつら、耳が聞こえないのか？と思うくらいである。仕方がないので牛たちが自発的にどいてくれるのを待つしかない。しかしよく見ると牛たちだけで歩いているのではなくて少し離れたところを飼い主も歩いているのだが、慌てて自分の牛を追いつける様子も恐縮する様子もない。まことに動物たちにとっては天国のような国である。

ついでにハエの話をするがブータンではハエもよく飛んでいる。(ただしこれは夏だったからであろうと思う。五月や十二月に行った時には見なかった。)しかし人々は全く気にしない。食べ物に止まろうと自分の顔に止まろうとガイドさんも運転手さんも全く気にしていないようだった。日本だったらもし飲食店内にハエがいたら大問題である。料理に一匹で

もハエがくっいたらお客は怒って帰るのみならずネットで悪評が流れてその店はずぶれてしまうかもしれない。ブータンの人たちばかりの中において、私一人だけが手でハエを追いつづけていた。悪いと思ったが一度だけガイドさんに尋ねてみた。「ブータンではハエは気にしないんですか？」するとガイドさんは当然のように答えた。「仏教国ではノープロブレムです。」

さて話が牛に戻るが、牛は道路の上だけでなく山腹のあちこちにも見られた。傾斜四十度くらいの斜面に立って平気で草を食べていた。ブータンの道路はだいたい平均すると標高3000mくらいのところを走っている。そこは山の中腹でその上にも下にも森だけではなく村があり畑があり見事な棚田があり当たり前のように人が住んでいる。谷はかなり深い。でもその深い谷の下の方にもである。ブータンはティンプーやパロに人口が集まっているが地方のいくつかの町は勿論、途中にも小さな村があつて普通に人が住んでいる。つまり日本で言われているような「過疎化」はしていない感じである。

ブータンでは英語も公用語なのでよく通じる。幼稚園のころから教え始めるそうである。五日目の晩に泊めていただいた家には三人の子供がいて八歳と五歳の男の子、三歳の女の子であったが八歳で小学校二年生の子の英語が日本の中一から中二くらいのレベル、五歳の子は幼稚園なのでABCが読めるようになったくらい、そして三歳の子は流石に全くわからないのでお話をできず、一人仲間外れみたいでちょっと可哀そうであった。



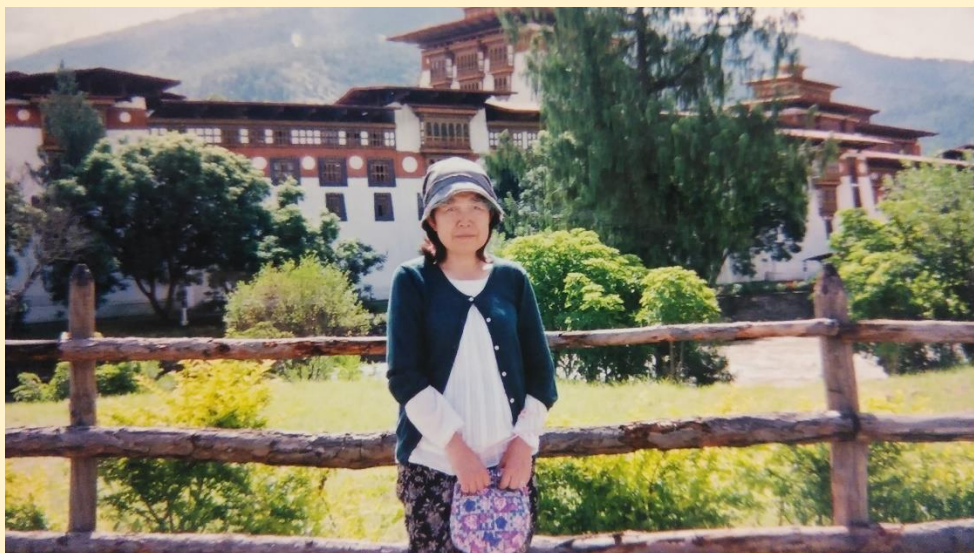
一泊させていただいたパロの農家のみなさん

大人の英語力にはバラつきがあり、ガイドさんの英語レベルは私といい勝負、でも時々変な発音で言うので意味がわからなくて困った。例えば彼はよく「ツチ」と言った。何度聞き直しても「ツチ」と聞こえる。とても英語とは思えずゾンカ語を混ぜているのかと思ったが向こうも時計を指しながら一生懸命。その時はようやく「十二時三十分」のことを言っているのだとわかった。でもその後も二、三度「ツチ」という言い方を聞いたので「なぜツチなんだろう？」と三日間くらい考えていた。そしてようやく思い当たった。「ああ、thirty がなまったのか！」でもだいたい話は通じていた。

ホテルの従業員の人たちは滑らかな発音で話していたが私の耳の方が未熟でなかなか聞

き取れないこともあった。

お寺の話。今回の旅行中いろいろなお寺を見学した。ガイドさんがとても信心深い人のようでとても熱心にいろいろ説明しながら案内してくれる。拝礼の仕方は五体投地というのかどうかよくわからないのだが日本人から見ると大袈裟な動作なのでちょっとためらう。でも私もしなくてははいけないかと思って真似をしてみるのだがタイミングが遅れるので回数が一回少なくなったりする。ガイドさんはお賽銭をあげていたが私は何も聞いていなくて用意がなかったのでやらなかった。よかったのだろうか？



プナカゾンにて。ゾンというのは各県にある県庁と国分寺を合わせたようなもの。

それぞれのお寺の外観は違うと言えば違うのだが内部の様式や装飾の仕方、とか基本的なところは皆同じようだとは私には見えた。七世紀に建てられたお寺も十七世紀に建てられたお寺も建築様式は変わりませんか？と聞いてみたら「変わりません」とガイドさんも答えた。

そして私は思った。ブータンの人々は日本人にとってもよく似ていると初めは思ったのだが、それは勿論似ているところもあるのだが、旅を続けるにつれて正反対と言ってもいいほど日本人とは違うところのほうがずっと多いと感じるようになった。

ブータン人は日本人と顔がよく似ていて話し方も似ていておとなしくて真面目だということも似ている。外国人に対してもとても親切で相手が快適に過ごせるように最善を尽くしてくれる。しかしブータン人は日本人に比べて海外から良さそうなものが入ってきて簡単に自分たちのこれまでのやり方や生活を変えようとしなない。子供や若者が外国の文物の珍しさ、華やかさ、便利さに憧れるようなことは当然あるが、自分たちの生活様式を先進国のようにしたいと思っている様子はない。日本人は外国人の前でナイフやフォークを

使えないと恥ずかしいと考えたりするが、ガイドさんや運転手さんは堂々と手指を用いて食事をしていました。

でも泊めていただいた家の子供はスプーンを使っていたな。単にやりやすい便利な方を選んでいただけだろうか？若い女性とかと話をしていないから私にはまだ女の人たちの考えていることはわからなかったが、女の人たちはやはり西洋風の生活がしたいとかヨーロッパ人と結婚したいとか考えたりするのだろうか？でもそんなに急激にブータンの生活が変わるとは思えない。何より食べ物の違いがある。ブータンの人々が外国から渡来したお菓子や料理を美味しいと思ったとしても、それは時たま食べられれば嬉しいという感じで日常の食事を丸ごと外国風のものに変えてしまおうと考えるととても思えない。（これについては日本もそうか、とあとで気がついた。）

それにブータンの国の政治にかかわる人たちは諸外国が奔放な経済発展の波に呑み込まれた結果どのような弊害に陥っているかということをよく学んで知っているのだからそうならないようにコントロールをかけているのである。ブータンは国土も小さいし中国とインドという二つの大国に挟まれているから、安易に海外からのいろいろな物の流入を許すことは国家の存亡にかかわる危険も大きいということなのである。

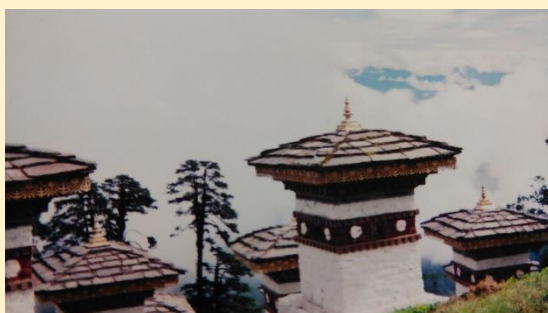
私にとってブータンの旅がとても楽しかったのは、ブータンだからということもあるが半分は「一人だったから」だと思う。一人だったから連れの人に配慮することは何もなく、下手な英語をどんどん使ったり着物を着たり、長～い乗り換え時間も一人で退屈していればすみ、連れのご機嫌をとったりする必要もなかったわけである。第一不慣れた食事に私だって苦労したんだから子供たちなんかだったらもうどうしようもないことになっていたはずである。一日で体調を崩されて、旅行中止とか、そうまで行かなくても旅は台無しになっていたことであろう。あるいはそうではなくても私よりずっと旅慣れた人と一緒に旅行したとするならば、多分リードされるだけになってしまってあまり楽しくなかったのではないかと思う。

だから過ぎてみればあまり快適ではなかったトイレやバスや、苦労した食事や、うるさいハエや、下痢をしたことや、タイの空港で六時間も待たなければならなかったことや、最後の機内食が全く味のついていない卵を三個くらい使ったような大きなオムレツだったこと、トライしてみたが食べられず、疲れが倍増するのを感じたことなども皆いい思い出である。

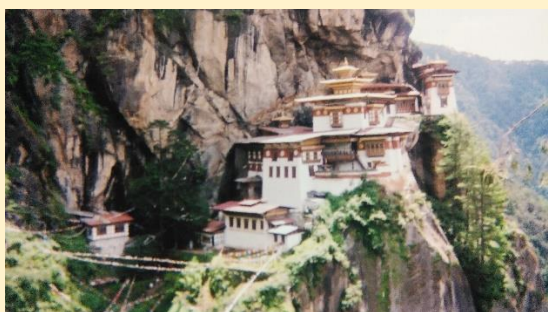
もしまた行く機会があったら（一週間なくてもいい。三、四日でもいい。）もっと快適な旅になるように考えてみようと思っている。クセになりそうだ。もうツアー旅行なんかできない。



ティンプーの名所、メモリアルチオルテン



ティンプーより西に行く時には必ず越える峠、ドチュ・ラの風景





タクツァン僧院と登る途中にある休憩所。この旗はルンダといい、経文が印刷されている。

【完】